

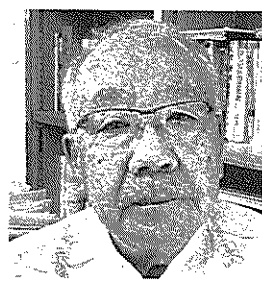
古層を読み

今を見る

「県史各論編9 民俗」発刊

赤嶺 政信

□上



あかみね・まさのぶ 1954年生まれ。専門は民俗学、琉球大学名誉教授、文学博士。新沖縄県史編集専門部会(民俗)部会長。主な著書に『シマの見る夢―おきなわ民俗学散歩』(1998年、ポーターインク)、『歴史のなかの久高島―家・門中と祭祀世界』(2014年、慶友社)、『キジムナー考―木の精が家の神になる』(2018年、榕樹書林)など。

つて、民俗資料の蓄積は順調に進展してきた。本書の論考のほとんどは、多くの先人たちの努力によって収集された沖縄各地の民俗資料を広く活用することによってはじめて執筆が可能となったものであり、「沖縄の民俗研究の集大成」と呼ぶのは、第一義的にはその意味においてである。

た背景について私なりの関心で述べたい。柳田國男から直接指導を受けた経験のある源武雄は旧民俗編(民俗1)の「第一章序説 沖縄の民俗―その位置づけと特色」を執筆しているが、その中で「日本民俗の古俗保存地域」という節を設け、沖縄の民俗を日本古代の民俗と比較して研究することの意義を説いている。沖縄の民俗に日本民俗の古形を見いだすのが柳田國男の方法だという理解があるが、それが必ずしも正しくないことは拙稿「柳田國男の民俗学と沖縄」で論じておいた。

ある。じつは、民俗学が課題とすべきは過去ではなく現在であり、民俗の沿革を辿る必要があるのは、あくまでも現在をよりよく知るためだというのが柳田民俗学の方法であり、その点、1947年の「現代科学といふこと」において、「民俗学を古い昔の世の穿鑿から足を洗わせ、現代科学の一つにしなければならぬ」と主張をしていることから明らかである。

県教育委員会がこのほど「沖縄県史 各論編9 民俗」を発刊した。発刊の意義や特徴的なテーマなどについて識者3人に寄稿してもらった。

◇

本書の構成は、「沖縄の民俗研究史」「奄美・沖縄の自然環境と人々の暮らし」「沖縄の民俗と中国、東アジア」の3論考から成る「総論」を巻頭に配し、以下は第1部「人と自然とのつながり」、第2部「人と暮らし」、第3部「人と人とのつながり」、第4部「生をつなぐ」、第5部「人

と超自然的世界とのつながり」、第6部「近現代と民俗」となっている。県史の民俗編としては

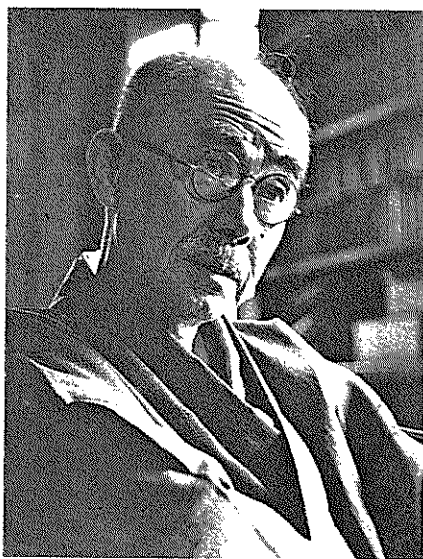
い事実といえる。県外出身の沖縄研究者の増加は民俗研究に限らないが、日本復帰後の社会状況の変化に応じ、また執筆者の多きは、沖縄の民俗研究の裾野の広がりを如実に示している。

の實踐の前提として、フィールドワークによる民俗資料の収集が不可欠であるが、沖縄の場合、柳田國男の影響もあって戦前あるいは戦後の早い時期からの調査研究の成果、琉球大学の民俗研究クラブによる調査報告書(創刊号は1960年)や市町村史の民俗編および学誌の刊行などが相俟

第6部「近現代と民俗」を構成する「屋敷の形成と展開」「郷友会」「マチの形成」「移民と民俗」「観光と民俗」「戦争と民俗」基地と場所」「老いと介護と民俗学」「沖縄そばの成立と展開」「闘牛」「近現代のエイサーの展開」の諸項目は、旧民俗編にはなかった本書の特徴と言えるものであり、第6部が設定された

本書は21世紀初頭における沖縄民俗学の見取図といえるが、本書の刊行が多くの人にとって自分たちの足元にある(あった)豊かな生活文化とそれをめぐる様々な問題に関心を向ける契機になることを切に願う。

文化



書斎で撮影された1951(昭和26)年ごろの柳田國男氏(成城大学民俗学研究所提供)

沖縄県史各論編9として刊行された民俗編について、その紹介を行い、加えて編集に関わった者として「生をつなぐ」、第5部「人と暮らし」、第3部「人と人とのつながり」、第2部「人と自然とのつながり」、第1部「人と自然とのつながり」の2冊が既に刊行されている。

『沖縄県史の民俗1』『沖縄県史の民俗2』(1972~1973)の2冊が既に刊行されている。

じたものであり、また執筆者の多きは、沖縄の民俗研究の裾野の広がりを如実に示している。

第6部「近現代と民俗」を構成する「屋敷の形成と展開」「郷友会」「マチの形成」「移民と民俗」「観光と民俗」「戦争と民俗」基地と場所」「老いと介護と民俗学」「沖縄そばの成立と展開」「闘牛」「近現代のエイサーの展開」の諸項目は、旧民俗編にはなかった

本書は21世紀初頭における沖縄民俗学の見取図といえるが、本書の刊行が多くの人にとって自分たちの足元にある(あった)豊かな生活文化とそれをめぐる様々な問題に関心を向ける契機になることを切に願う。

『沖縄県史 各論編9 民俗』(5千円)は県教育委員会のホームページ「沖縄県史料の販売」から購入を申し込める。

問い合わせは県教育庁文化財課史料編纂班098(0080)30636。

沖縄民俗学の集大成

研究蓄積、近現代と結ぶ

『沖縄県史の民俗1』『沖縄県史の民俗2』(1972~1973)の2冊が既に刊行されている。

じたものであり、また執筆者の多きは、沖縄の民俗研究の裾野の広がりを如実に示している。

柳田と伊波

の實踐の前提として、フィールドワークによる民俗資料の収集が不可欠であるが、沖縄の場合、柳田國男の影響もあって戦前あるいは戦後の早い時期からの調査研究の成果、琉球大学の民俗研究クラブによる調査報告書(創刊号は1960年)や市町村史の民俗編および学誌の刊行などが相俟

第6部「近現代と民俗」を構成する「屋敷の形成と展開」「郷友会」「マチの形成」「移民と民俗」「観光と民俗」「戦争と民俗」基地と場所」「老いと介護と民俗学」「沖縄そばの成立と展開」「闘牛」「近現代のエイサーの展開」の諸項目は、旧民俗編にはなかった

本書は21世紀初頭における沖縄民俗学の見取図といえるが、本書の刊行が多くの人にとって自分たちの足元にある(あった)豊かな生活文化とそれをめぐる様々な問題に関心を向ける契機になることを切に願う。

問い合わせは県教育庁文化財課史料編纂班098(0080)30636。

本書はそれからのほぼ半世紀を経ての刊行ということになるが、旧民俗編の執筆者が16名で、そのすべてが県出身者であるのに対して、本書の執筆者は60余名で、その半数弱は県外出身者であるといつのは興味深い

沖縄の民俗研究の本格的な開始は、1921年の柳田國男の来沖とその際の伊波普猷との出会いが契機となったが、二人の出会いから約1世紀を経て刊行され

第6部「近現代と民俗」を構成する「屋敷の形成と展開」「郷友会」「マチの形成」「移民と民俗」「観光と民俗」「戦争と民俗」基地と場所」「老いと介護と民俗学」「沖縄そばの成立と展開」「闘牛」「近現代のエイサーの展開」の諸項目は、旧民俗編にはなかった

本書は21世紀初頭における沖縄民俗学の見取図といえるが、本書の刊行が多くの人にとって自分たちの足元にある(あった)豊かな生活文化とそれをめぐる様々な問題に関心を向ける契機になることを切に願う。

問い合わせは県教育庁文化財課史料編纂班098(0080)30636。

問い合わせは県教育庁文化財課史料編纂班098(0080)30636。